

世阿弥の定家受容

齋藤 彰

序

金春禅竹(応永二年(一四〇五)―文明二年(一四七〇)ごろ)は、謡曲『定家』の作者として確定している。曲中『拾遺愚草』から二四〇八・二七一三・二六〇四番歌三首を引く。問答に「偽のなき世なりけり神無月誰がまことより時雨初めけん」、クセ冒頭に「あはれ知れ霜より霜に朽ち果てて世々に古りにし(四代にふりぬる)山藍の袖」、上ゲ端から地にかけての「嘆くとも恋ふとも逢はむ道やなき君葛城の峰の(白)雲」である。(新日本古典文学大系57『謡曲百番』一〇九―一一一頁参照。)この一端においても禅竹の定家受容は顕著に認められる。対して、世阿弥の定家受容の研究は極めて乏しい。そこで、世阿弥(貞治二年(一一三三)^(註1)か―嘉吉三年(一四四三)か)の定家受容について、世阿弥の和歌観を確認し、定家詠と定家偽書の受容の観点から分析したい。

一 世阿弥能楽論における和歌観

世阿弥は、「歌道は風月延年の飾りなれば、もつともこれを用ふべし。」『風姿花伝』(序)に歌道は能の美的装飾であるのでとりわけ歌道を用いる

べきことを述べ、歌道を重視している。具体的には、「序にいはいはく、「歌道を少ししたしなめ」とは、これなり。(中略)自作なれば、言葉・ふるまひ・案のうちなり。されば能をせんほどの者の、和才あらば、申樂を作らんと、やすかるべし。これ、この道の命なり。」『風姿花伝』(第三問答条々)に能の命として、和歌・和文の本説・引歌による自作の必要性を説く。それは、競演である立合能に勝つために能数を持って、敵人の能とは変わった風体を違えてする自作自演の工夫である。

また、「秘云。たゞ、音曲の至道には、和歌の言葉を取り合はせて書付すべき也。そのゆへは、先、五七五の句体の本体なり。」(『曲付次第』)に、音曲の奥義は、和歌の言葉を取り合わせて謡曲文を書くことで、その理由は謡曲文の基本単位である七五調の本体が和歌であると秘伝する。謡曲文章の文体は和歌の七五調に基づく。「ただ能には、耳近なる古文・古歌、和歌言葉もよきなり。」にも本説・引歌・歌語を能には良いと説く。

「ただ美しく柔和なる体、幽玄の本体なり。」(『花鏡』(幽玄之入堺事) 応永卅一年(一四二四)六月)と定義し、「幽玄の風体、第一とせり。」(同)と幽玄な姿を第一とする。その有り様の一つである「言葉の幽玄」のためには、歌道が必要であることを、「言葉の幽玄ならんためには歌道を習ひ、姿の

幽玄ならんためには、尋常なる為立の風体を習ひ、一切ことごとく、物まねは変はるとも、美しく見ゆる一かかりを持つこと、幽玄の種と知るべし。」(同)に述べ、能の本質である幽玄を支える基盤として、和歌の意義を世阿弥は認めていた。

以上、世阿弥能楽論における和歌観について、能の美的装飾である和歌の重視、和歌・和文の本説・引歌・歌語による自作の必要性、謡曲文の基本単位である七五調の本体が和歌であること、能の第一の風体である幽玄の有り様の一つである言葉の幽玄、即ち和歌の言葉続きによる姿の美しさ、のように多角的に実践的、審美的に能を支える基盤として、和歌の意義を世阿弥は認めていた。

二 定家詠「佐野のわたりの雪の夕暮」の受容

世阿弥の『遊楽習道風見』に定家の名歌として「佐野のわたりの雪の夕暮」(『新古今和歌集』冬・六七一・『拾遺愚草上』九六七)が載る。

「小馬とめて袖打はらふ蔭もなし佐野のわたりの雪の夕ぐれ」、定家の名歌なり。抑、此歌、名歌なれば、元より面白く聞えて、さて面白き所をしらず。只旅行の折節、雪降りて、立寄るべき陰もなき、路次の体かと聞えたり。但、歌道は不知の事なれば、別の感心もやあるらんと、道の人に尋ぬれ共、只「歌の面風のごとし」と也。然ば、聞る所、さればとて雪を賞翫の心も見えず、在所を知るにも遠見などもなき山河のほとりに、誠に陰も寄るべも便りなき道行ぶりの、面にまかせたる口ずさみ歎と聞えたり。若、堪能其人の態は、かやうに言はれぬ感もあるやらん。天台妙釈にも、「言語道断、不思議、心行所滅之処、是妙也」と云り。かやうの姿にてやあるべき。当芸にも、堪能其

物なむどの位に至らん時は、此「小馬とめて」の歌の如く、まさしく造作の一もなく、風体心をも求めず、無感の感、離見の見にあらはれて、家名広聞ならんをや、遊学の妙風の達人とも申べき。(『遊楽習道風見』)

この一首の訳は、「駒をとめて、袖に積もる雪をふり払う物陰もない。佐野の渡りの雪の夕暮れよ。」である。本歌は「苦しくも降りくる雨かみわの崎狭野の渡りに家もあらなくに」(万葉・卷三・二六五・長忌寸奥麻呂)。本歌の「狭野の渡り」は、紀伊国の歌枕(和歌山県新宮市)。新古今時代には、『八雲御抄』のように大和国の歌枕として解されていた。定家は、本歌の雨を雪に変えて、旅中の困苦を転じ、雪の夕暮の白く冷えた閑寂美を主題とする。幻想的で物語・絵画的な歌である。

定家詠「佐野のわたりの雪の夕暮」の「堪能其人の態」は、能の「堪能其物なむどの位」に通い、その位に至るであろう時、「無感の感、離見の見にあらはれて」、「妙風の達人」という。「妙」は、『天台妙釈』に「言語道断、不思議、心行所滅之処、是妙也」と定義する。世阿弥は、『遊楽習道風見』をふまえて、『九位』に「妙花風 妙と云ば、言語道断、心行所滅なり。(中略)当道の堪能の幽風、褒美も及ばず、無心の感、無位の位風の離見こそ、妙花にやあるべき。」(『九位』)と述べ、最高位の妙花風の本質を「無心の感、無位の位風の離見」にみる。

世阿弥作『佐野の船橋』(『世子六十以後申楽談儀』)は、現行『舟橋』である。「佐野の船橋は、根本、田楽の能なり。しかるを書き直さる。昔能なりしを、田楽もしければ、久しき能なり。詳しくは『三道』にあり。この『三道』は、応永三十年(一四二三)に書かれしほどに、それより後、本になるべき能、幾らもあるべし。」(『世子六十以後申楽談儀』)に述べるよ

うに、田楽の古能を『三道』以前に世阿弥が改作したものである。世阿弥は、『舟橋』の上歌において、「所は同じ名の、所は同じ名の」と繰り返して、紀州国の「狭野の渡り」(定家詠では大和国の「佐野のわたり」と同じ名の上野国の佐野の渡し場であることを強調する。次に「上歌」を示す。

〔上歌〕同 所は同じ名の、所は同じ名の、佐野のわたりの夕暮に、袖うち払ひて、御通りあるか鈴懸の、比も春也河風の、花吹き渡せ船橋の、法に往来の、道作り給へ山伏、峰々巡り給ふとも、渡りを通らでは、いづくへ行かせ給ふべき。〔舟橋〕

〔上歌〕は、七五調が中心で、叙景や登場人物の心情を述べる。「佐野のわたりの夕暮に、袖うち払ひて、」は、定家詠「駒とめて袖打ち払ふ蔭もなし佐野の渡りの雪の夕暮」に基づく。冬を春に、雪を花に転じて、「夕暮」を受容している。佐野舟橋の名所は、由阿の万葉註釈書『詞林采葉抄』第五に次のように説明している。

佐野舟橋 此橋在所先達歌枕處々ニカハレリ。然而當集第十四卷歌

カミツケノ佐野ノ舟橋トリハナシオヤハサクレトワハサカルカエ

トリハナシトハ此橋ヲ河ニハ渡サ、ルニヤ。路ノ両方水田ニテ、板ヲウチ渡

シ、スルトカヤ。然者水ナキ時ハトリハナチテヲクト申。同卷哥云

クルシクモフリクル雨カミワカサキサノ、渡ニ家モアラナクニ

此哥ハ近江国ノ佐野ニヤ

此哥ヲトリテ雨ヲ雪ニトリナシテヨミ玉ヘル

駒トメテ袖ウチ拂陰モナシサノ、渡ノ雪ノ夕暮 京極黄門(註2)

なお、定家詠「佐野のわたりの雪の夕暮」の世阿弥の受容は、観阿弥作・

世阿弥改作(註3)『通小町』(古称「四位少将」)のシテ(四位少将の霊)と女(小野小町の霊)の〔掛合〕や〔一セイ〕〔ノリ地〕にも認められる。次にその〔掛合〕〔一セイ〕〔ノリ地〕を示す。

〔掛合〕シテ 君を思へば徒歩跣足。

ツレ さてその姿は。

シテ 笠に蓑(笠を見る)、

ツレ 身の憂き世とや竹の杖、

シテ 「月には行くも暗からず(月を見あげる)

ツレ 「さて雪には、

シテ 「袖を打ち払ひ(右袖を見つめ、袖の雪を払う)、(中略)

〔一セイ〕女 夕暮は、ひとかたならぬ思ひかな。

〔ノリ地〕シテ 夕暮はなにと 地 ひとかたならぬ、思ひかな

定家詠第二句と第五句を受容して、百夜通いの四位少将と小野小町の心情を叙景に重ねて表現している。

以上、世阿弥における定家詠「佐野のわたりの雪の夕暮」の受容について、『遊楽習道風見』に定家詠の「堪能其人の態」は、能の「堪能其物なむどの位」・「堪能の幽風」に通うと説き、『遊楽習道風見』や『九位』に最高位の妙花風の本質を「無心の感、無位の位風の離見」にみると説くこと、世阿弥作『佐野の船橋』(現行『舟橋』)の上歌や観阿弥作・世阿弥改作『四位少将』(現行『通小町』)〔掛合〕〔一セイ〕〔ノリ地〕に定家詠を引いて叙景に心情を重ねる表現を認めた。

三 定家詠「あしのはわけにすぐるうら風」の受容

世阿弥作『忠度』（古称『薩摩守』）（世子六十以後申楽談儀）の前場の〈上歌〉に定家詠「夏蟲のひかりぞそよぐ難波がたあしのはわけにすぐるうら風」（『拾遺愚草』五三〇・藤原定家）を受容する。〈上歌〉を次に示す。

〔上歌〕
ワキ 蘆の葉分けの風の音、蘆の葉分けの風の音、聞かじとするに憂き事の、捨つる身迄も有馬山、隠れかねたる世中の、憂き心は徒夢の、覚むる枕に鐘遠き、浪速は跡に鳴尾潟、沖波遠き小舟かな、沖波遠き小舟かな。
〔忠度〕

定家詠初・二句の「ひかりぞそよぐ」「夏蟲」は、螢である。世阿弥は定家詠の夏を春に転じ、〈下歌〉「月も宿借る昆陽の池」の「蘆の葉分けの風の音」に蘆の名所である難波を暗示し、難波潟を鳴尾潟に転じて、「世中の、憂き心は徒夢」と叙景に心情を重ねる。「徒夢」はあてにならない、儂い夢の意。中世までの歌語にはなく、『舟橋』（世阿弥作）・『百万』（観阿弥作・世阿弥改作『世子六十以後申楽談儀』古称『嵯峨物狂』、『閑吟集』34『安子』（廢曲）の夫を待つ妻の心情の一節）に載る。

四 定家詠「あふはわかれ」・「世をも人も恨まねど」の受容

世阿弥作『班女』（『世子六十以後申楽談儀』の〈ヘクセ〉に定家詠「はじめよりあふはわかれと聞きながら暁しらで人をこひける」（『統拾遺和歌集』恋三・八二六・藤原定家）、「身を知れば人をも世をも恨まねど朽ちにし袖の乾く日ぞなき」（『拾遺愚草』一七二四・藤原定家）の二首を受容する。〈ヘクセ〉を次に示す。

〈ヘクセ〉同 翠帳紅閨に、枕ならぶる床の上、馴し衾の夜すがらも、同穴の跡夢もなし。よしそれも同じ世の、命のみをさりととも、いつまで草の露の間も、比翼―連理の語らひ、その驪山宮の私語も、誰か聞伝へて、今の世まで洩らすらん、去にてもわが夫の、秋より先に必ずと、夕の数は重なれど、徒し言葉の人心、頼めて―来ぬ夜は積もれ共、欄干に立ち尽くして、そなたの―空よと眺むれば、夕暮の秋風、嵐山嵐野分も、あの松をこそは訪るれ。わが待つ人よりの、音信をいつ聞かまし。女 せめてもの、形見の扇手に触れて 同風の便と思へ共、夏もはや杉の窓、秋風―冷ややかに吹落て、団雪の―扇も雪なれば、名を聞もすさましくて、秋風恨みあり、よしや―思へば是も実、逢ふは別れなるべき、其報ひなれば今更、世をも人も恨むまじ、唯思はれぬ身の程を、思ひ―続けて独り居の、班女が閨ぞさびしき。（『班女』）

「クセ」は、曲舞を取り入れた七五調の叙事的韻文の楽曲で、一曲の中心部分である。「会者定離」をふまえた「逢ふは別れ」に、「今更、世をも人も恨むまじ、」と定家詠二首の別離と諦念を重ねて強調して、「班女が閨ぞさびしき」と待つ女の孤閨の嘆きを余情とする。

『世子六十以後申楽談儀』に『班女』の〈ヘクセ〉について、次のように、曲舞に込めた孤閨の寂しさという深い意図を伝えるために閨に洩れる非情な月や形見の扇に寄せて慕情を重ね、それぞれの謡の具体的注意を的確に述べる。

班女に、「せめて閨漏る月だにも、しばし枕残らずして、また独寝となりぬるぞや」、大事の底性根あり。「なりぬるぞや」、面白きかかりなり。何も同じことなれども、この曲舞、いづくも底性根、ゆるかせなるべからず。「そなたの空よと」の「よ」をば、幼く、ちやつとつぐべし。「わが待つ人よりのおとづ

れ」の「お」文字、盗むべし。「よしや思へば」、「も」を持つべし。「班女が聞くと移るところ、深くても浅くてもわるかるべし。〔世子六十以後申楽談儀〕

五 定家偽書『三五記』の受容

—世阿弥能における〈廻雪の袖〉「雪を廻らす花の袖」の表現機能—

定家に仮託した偽書である『三五記』の「歌體事 第一幽玄體付 行雲體 廻雪體」に、行雲・廻雪は幽玄の別名で、余情がある姿とみる。該当部分を次に示す。

行雲廻雪の面體と申すも、たゞ幽玄の中の餘情なり。但、心あるべきにや。幽玄は惣称、行雲廻雪は別名なるべし。所詮幽玄といはるゝ歌の中に、なほ勝れて、薄雲の月をおほひたるよそほひ、飛雪の風に漂ふけしきの心地して、心詞の外にかけのうかびそへらむ歌を、行雲、廻雪の體と申すべきとぞ亡父卿申されし。(中略) やさしく物柔かなるすぢ(『三五記』)

『愚秘抄』でも「行雲・廻雪といふは幽玄本意也。」と幽玄の姿とみる。「飛雪の風に漂ふけしき」(『三五記』)は、『文選』「洛神賦」の神女の姿を比喻した「飄飄兮、若流風之迴雪」(飄飄として、流風の雪を廻らすごとし。)を受容したものである。世阿弥は、『花鏡』において、「幽玄の風体の事。諸道・諸事において、幽玄なるをもて上果とせり。ことさら当芸において、幽玄の風体、第一とせり。」と能の理想を幽玄と述べ、「ただ美しく柔和なる体、幽玄の本体なり。」と幽玄とは柔和美であることを論じている。

世阿弥能の〈廻雪の袖〉一例、〈雪を廻らす〉五例の表現機能の諸相を吟味して、世阿弥の論理を明確にしたい。なお、この五項は、拙論を基盤としている。

世阿弥の脇能「放生川」の後場で、竹内の神(後シテ)が月影のもとで莊重な舞(真ノ序ノ舞)を舞い、さらに四季の和歌を奏して舞い、石清水八幡宮の神徳を讃え、和歌の道を寿ぐ。春の喜春楽・夏の傾盃楽・秋の秋風楽の舞の後、北庭楽を舞う場面に「廻雪の袖」の表現がある。

地 日数も積もる雪の夜は シテ 廻雪の袖を醸し 地 さて百敷の舞には
シテ 大宮人のかざすなる 地 「櫻 シテ 「橘 地 もろともに 花の冠を
傾けて やうこくよりも立ち廻り 北庭楽を舞ふとかや(『放生川』)

『謡曲大観 第四卷』でも「廻雪の袖」と表記する。脇能らしい莊重な舞(真ノ序ノ舞)の後に、四季の舞楽を舞い、和歌の讃嘆、聖代の繁栄と祝福で留める構成において、定家偽書歌論の幽玄の余情体を受容し、「北庭楽」の舞姿の幽玄美を形容した表現である。

世阿弥の『井筒』(三番目物)の後場、業平の形見の衣を着た紀有常の娘の霊(後ジテ)が業平思慕の移り舞を舞う直前の〈一セイ〉の場面に「雪を廻らす花の袖」の表現がある。

「サン」シテ あだなりと名にこそ立てれ桜花 年に稀なる人も待ちけり か
やうに詠みしもわれなれば 人待つ女ともいはれしなり われ筒井筒の昔よ
り 眞弓槻弓年を経て 今は亡き世になりひらの 形見の直衣身に触れて
「セイ」シテ 恥かしや 昔男に移り舞 地 雪を廻らす花の袖
【序ノ舞】(井筒)

「雪を廻らす花の袖」は、紀有常の女の霊の移り舞の舞姿の〈余情ある幽玄美〉を形容している。「人ないのかかり美しく、静かなるよそほひにて、見所面白くは、これ舞の幽玄にてあるべし。」(『花鏡』)と世阿弥は

いい、『井筒』の位である上花の「閑花風」を「雪を銀坑裏に積みて、白光清浄なる現色、まことに柔和なる見姿」(註14)と説いている。

世阿弥の『山姥』(五番目物)の後場、「掛合」の場面に「袖は白妙 雪を廻らすこのはなの」の表現がある。

【掛合】シテ「春の夜の一刻を千金に替へじとは 花に清香月に陰 これは願ひのたまさかに ゆき逢ふ人の一曲の その程もあたら夜に はやはや歌ひおはしませ ッレ げにこの上はともかくも 言ふに及ばぬ山中に シテ」
声の山鳥羽を叩く ッレ 鼓は滝波 シテ「袖は白妙 ッレ」雪を廻らすこのはなの シテ「難波のことか ッレ」法ならぬ 「次第」地「よしあしびきの

山姥が よしあしびきの山姥が 山廻りするぞ苦しき (註15)

「袖は白妙 雪を廻らすこのはなの」は、白妙の雪を廻らす花の袖の意で白色が強調されて、後に続く山姥の憂き世の輪廻を示す山廻りの曲舞の〈柔和な余情ある幽玄美〉を形容する。

世阿弥作・観世小次郎信光改作(現行詞章、演出)の『右近』(協能物)の後場、北野の末社桜葉の女神の神舞【中ノ舞】の後、【破ノ舞】の前の「ノリ地」に「月も照り添ふ 花の袖 月も照り添ふ 花の袖 雪を廻らす 神神楽の」の表現がある。

【中ノ舞】

〔ノリ地〕地「月も照り添ふ 花の袖 月も照り添ふ 花の袖 雪を廻らす
神神楽の手の舞ひ足踏み 拍子を揃へ 声澄みわたる 雲の梯 花に戯れ
枝に結ばほれ 挿頭も花の 糸桜。

【破ノ舞】(註16)
(『右近』)

世阿弥作・観世小次郎信光改作(現行詞章、演出)の『右近』の後場、北野の末社桜葉の女神の神舞【中ノ舞】の後、【破ノ舞】の前の「月も照り添ふ 花の袖 月も照り添ふ 花の袖 雪を廻らす 神神楽」は、神舞の〈白光清浄な柔和な余情ある幽玄美〉を形容する。

世阿弥作『融』(五番目物)の後場、「サシ」に続く「一セイ」に「雪を廻らす雲の袖」の表現がある。

【サシ】シテ 忘れて年を経しものを またいにしへにかへる波の 満つしほがまの浦人の 今宵の月をみちのくの ちかの浦廻も遠き世に その名を残す公卿 融の大臣とはわがことなり われ塩竈の浦に心を寄せ あの籬が島の松蔭に 名月に舟を浮かめ 月宮殿の白衣の袖も 三五夜中の新月の色。

【一セイ】シテ 千重ふるや 雪を廻らす雲の袖 地 さすや桂の枝々に シテ 光を花と散らすよそほひ 地 ここにも名に立つ白川の波の あらおもしろや 曲水のさかづき 受けたり受けたり遊舞の袖

【早舞】(註17)
(『融』)

融大臣の懐旧の遊舞【早舞】の前の「雪を廻らす雲の袖」は、「名月」・「白衣の袖」・「新月の色」・「光」による白色の強調とともに、遊舞の〈白光清浄な柔和な余情ある幽玄美〉を形容する。

世阿弥作『錦木』(四番目物)の後場、【黄鐘早舞】の前の「ワカ」に「雪を廻らす 舞の袖」の表現がある。

〔ワカ〕地 嬉しやな 今宵あふむのさかづきの 雪を廻らす 舞の袖かな
舞の袖かな

【黄鐘早舞】(『錦木』)

世阿弥作『錦木』の後場、三年も錦木を立てながら実らぬ恋の恨みの後、「雪を廻らす 舞の袖」は、僧の回向で今宵逢えた歎の舞（観世・金剛―黄鐘早舞、宝生―中の舞、金春―男舞）の「白光清浄な柔和な余情ある幽玄美」を形容する。

以上、定家仮託偽書『三五記』の廻雪體を受容した世阿弥の「雪を廻らす」の論理は、後ジテの舞（神舞、移り舞、曲舞、早舞他）の「白光清浄な柔和な余情ある幽玄美」を形容するもので、『世子六十以後申楽談儀』（永享二年（一四三〇）成立）や『五音』（永享六年（一四三四）二月以前成立）のころの世阿弥晩年の能におけるものである。世阿弥は、『花鏡』（応永三十一年（一四二四）六月）において、「幽玄の風体の事。諸道・諸事において、幽玄なるをもて上果とせり。ことさら当芸において、幽玄の風体、第一とせり。」と能の理想を幽玄と述べ、「ただ美しく柔和なる体、幽玄の本体なり。」と幽玄とは柔和美であることを論じている。上花の「閑花風」である「白光清浄なる現色、まことに柔和なる見姿」（『九位』）の概念に適う。

六 定家偽書『愚秘抄』の受容―「皮・肉・骨」の論理―

定家に仮託した偽書『愚秘抄』に皮肉骨の三體のうち、「幽玄體」を皮と説く。

いは、つよきは骨、やさしきは（皮）、愛あるは肉也。此三躰には、先骨をもて本躰とすへきにや。いかにやさしく愛ありとも、つよき躰のなからんは、いみじからしとそ覚る。（中略）皮肉骨の三を十躰によせあはせて心得侍らば、挫鬼躰、有心躰、事可然躰、麗躰。是等は骨にあてなすらふへし。濃躰、有一節躰、面白躰。此三は肉にかたとるへし。長高、見様、幽玄の三をは、皮

の躰にかたとり侍へし。此三躰をいづれもはたらかさず、すへ侍らん哥そ大師の御筆にはかなひ侍へき。（『愚秘抄』^{（註18）}）

「長高、見様、幽玄の三」躰を「皮」、「濃躰、有一節躰、面白躰。此三」躰を「肉」、「挫鬼躰、有心躰、事可然躰、麗躰。」の四躰を「骨」に准え、「骨」を本躰とする。

世阿弥の『至花道』（応永廿七年（一四二〇）六月）「皮肉骨事」の条に定家偽書『愚秘抄』の「皮肉骨」の歌躰論を受容して、能の芸躰論による理想的な為手を説く。次に全文を示す。

一、この芸態に、皮・肉・骨あり。この三つ、そろふことなし。しかれば手跡にも、大師の御手ならでは、この三つそろひたるはなしと申し伝へたり。そもそもこの芸態に、皮・肉・骨の在所をささば、まづ下地の生得のありて、おのづから上手に出生したる瑞力の見所を、骨とや申すべき。舞歌の習力の満風、見にあらはるるところ、肉とや申すべき。この品々を長じて、安く、美しく、窮まる風姿を皮とや申すべき。また見・聞・心の三つにとらば、見は皮、聞は肉、心は骨なるべきやらん。（中略）今ほどの芸人を見及ぶ分は、ただ皮を少しするのみなり。それも、まことの皮にはあらず。（中略）下地の得たらんところは骨、舞歌の達風は肉、人ないの幽玄は皮にてありとも、三つを持ちたるばかりなるべし。三つそろふ為手とは、なほも申しがたし。そろふと申さん位は、たとへば、かくのごとくなりて、即座の風体はただ面白きのみにて、見所も妙見に亡じて、さて後心に安見する時、何と見るも弱きところのなきは、骨風の芸劫の感、何と見るも事の尽きぬは、肉風の芸劫の感、何と見るも幽玄なるは、皮風の芸劫の感にて、離見の見にあらはるるところを思ひ合はせて、皮・肉・骨そろひたる為手なりけるとや申すべき。（『至花道』^{（註19）}）

天性の発現したすぐれた芸態を「骨」、舞歌二曲の稽古の功を積んで完成した芸態を「肉」、これらの長所を發展させて「安く、美しく、窮まる風姿」を「皮」という。見・聞・心の三つに配すれば、見は皮、^(註20)聞は肉、心は骨にあたる。音曲においては、声は皮、曲は肉、息は骨、舞においては姿は皮、手は肉、心は骨である。生得の素質が骨、熟達した舞歌の効果は肉、幽玄な舞台姿が皮で、それぞれの見事な芸態をことごとく極めて、無上の安位・無風の芸位に達した為手が皮・肉・骨の揃った為手である。観客からすれば、その舞台では至妙の芸にただ面白く、恍惚として批判するゆとりもなく、舞台後、冷静に思い返して見た時に弱い所がないのは、骨風の芸が年功を積んだ感動で、技が尽きることがないのは、肉風の芸が年功を積んだ感動で、どう見ても幽玄なのは、皮風の芸が年功を積んだ感動である。能舞台がすんだ後、無心に残る感銘を思い合わせて、皮・肉・骨の揃った為手とみる。『二曲三人形図』の「天女の舞」において、「皮肉骨を万体に風合連曲可^(註21)為。」(皮・肉・骨の三風を一に総合して舞い通せ。)と注意する。

以上、定家偽書『愚秘抄』の〈皮肉骨〉の歌躰論を受容した世阿弥の『至花道』における、〈皮肉骨〉の芸態論と理想的為手論を讀解した。

結

世阿弥の定家受容について、世阿弥の和歌観を確認し、定家詠と定家偽書の受容の観点から分析した。先ず、「一、世阿弥能楽論における和歌観」において、美的装飾である和歌の重視、立合能に勝つ為の自作能の必要性、謡曲文の基本単位である七五調の本体が和歌であること、言葉の幽玄の為の世阿弥の和歌観を認めた。次に、「二、定家詠「佐野のわたりの雪の夕暮」

の受容」において、『遊楽習道風見』に定家詠の「堪能其人の態」は、能の「堪能其物なむどの位」・「堪能の幽風」に通うと説き、『遊楽習道風見』や『九位』に最高位の妙花風の本質を「無心の感、無位の位風の離見」にみると説くこと、最上位の妙花風即ち離見の見の比喩として、閑寂であるが優美さがある定家詠「雪の夕暮れ」を受容すること、世阿弥作『佐野の船橋』(現行『舟橋』)の上歌(叙情や心情)や観阿弥作・世阿弥改作『四位少将』(現行『通小町』)〈掛合〉〈一セイ〉〈ノリ地〉に定家詠を受容していることを認めた。「三、定家詠「あしのはわけにすぐるうら風」の受容」において、世阿弥作『忠度』(古称『薩摩守』)の前場の〈上歌〉に定家詠を受容して叙景に心情を重ねること、「四、定家詠「あふはわかれ」・「世をも人も恨まねど」の受容」において、世阿弥作『班女』の〈クセ〉に定家詠二首による別離と諦念を重ねて待つ女の孤閨の嘆きを余情とすることを認めた。「五、定家偽書『三五記』の受容」世阿弥能における〈廻雪の袖〉「雪を廻らす花の袖」の表現機能」において、世阿弥晚年の能における後ヅテの舞の〈白光清浄な柔和な余情ある幽玄美〉を形容する〈雪を廻らす〉の論理として世阿弥偽書(真作とされていた)の『三五記』の受容を認めた。「六、定家偽書『愚秘抄』の受容」〈皮・肉・骨〉の論理」において、世阿弥の『至花道』「皮肉骨事」の条の〈皮肉骨〉の芸態論と理想的為手論を讀解して、〈皮肉骨〉の論理に定家假託の偽書『愚秘抄』の受容を認めた。

註1 伊地知鐵男『伊地知鐵男著作集Ⅱ』(汲古書院 一九九六年一月)所収「東山御文庫本『不知記』を紹介して中世の和歌・連歌・猿楽のことに及ぶ」(二八八～二九五頁)初出「国文学研究」第三五集(昭和四二年三月)、小川剛生「世阿弥の少年期(上)——「不知記」(崇光院宸記)を読み直す——「観世」(観阿弥生

- 誕六八〇年・世阿弥生誕六五〇年 特別企画 平成二五年四月号)二七頁影印・翻刻参照。貞治二年世阿弥生年説は、田中 裕『世阿弥芸術論集』(新潮社 昭和五一年九月)二六七頁、岩波講座能・狂言『III能の作者と作品』(岩波書店 一九八七年一月)一六五頁西野春男他に知られる。表章『能楽史新考(二)』(わんや書店 昭和六一年三月)所収「世阿弥生誕は貞治三年か―世子十二年の年考―」(三六〇―三四頁)初出「文学」(昭和三八年一〇月号)は、貞治三年世阿弥生年説である。『国史大辭典8』(吉川弘文館 昭和六二年一〇月)「世阿弥」の項では、「生没年不詳」、「生年は貞治二年(二三六三)説が定説だが、翌三年説もある。没年は嘉吉三年(一四四三)とされるが、これは享年を八十とする一説による推定で、正確には不明。忌日は八月八日。」(一八九頁)と記す。
- 2 冷泉家時雨亭叢書 第六期 第七八卷『詞林采葉抄 人丸集』(朝日新聞社 二〇〇五年六月)二二四・二二五頁参照。
- 3 『五音』の記事、『三道』に世阿弥新風の碎動風鬼の能として『佐野の船橋』『四位の少将』が載る。
- 4 冷泉家時雨亭叢書 第六期 第四〇卷『中世歌学集 書目集』(朝日新聞社 一九九五年四月)一八一―二六〇頁、齋藤 彰「昭和女子大学図書館蔵『三五記』―解題・校異・影印―」(学苑九〇二号 平成二七年一月)一―五四頁参照。
- 5 佐佐木信綱編『日本歌学大系第四卷』(風間書房 昭和四六年三月)二九三頁参照。註4『中世歌学集 書目集』三五八・三五九頁参照。「幽玄鉢の哥とてあつめたる中に行雲、廻雪の姿あるへし。幽玄は惣名なり。行雲、廻雪は別号なるへし。いはゆる行雲、廻雪は艶女の譬名地。其に取てもやさしくけたかくして薄雲の月を帯たらん心ちせんを行雲と申へし。又、やさしく気色はみてたゞならぬか、しかもこまやかにて飛雪のいたくつよからぬ風にまよひちる心地せん哥を廻雪とは申侍へき。文選高唐賦云(下略)」。
- 6 高橋忠彦『文選(賦篇)下』(明治書院 平成一三年七月)三三八頁参照。
- 7 田中 裕校注『世阿弥芸術論集』(新潮社 昭和五一年九月)一三九頁参照。註7参照。
- 8 齋藤 彰「世阿弥の論理―「雪を廻らす花の袖」の表現機能―」(学苑)八七五号 平成二五年九月(二)〇(四)頁参照。
- 9 伊藤正義『謡曲集下』(新潮日本古典集成 新潮社 一九八八年一〇月)二二五・二二六頁参照。
- 10 佐成謙太郎『謡曲大観 第四卷』(明治書院 昭和六年二月 昭和五七年七月影印版)二四六七頁参照。
- 11 伊藤正義『謡曲集上』(新潮日本古典集成 新潮社 昭和五八年三月)一一〇頁参照。
- 12 註7一四〇頁参照。
- 13 註7一六六頁参照。
- 14 註10二六三・二六四頁参照。
- 15 註12一四三・一四四頁参照。
- 16 伊藤正義『謡曲集中』(新潮日本古典集成 新潮社 昭和六一年三月)四〇七・四〇八頁参照。
- 17 註4『中世歌学集 書目集』三六五・三六六頁参照。永正一七年(奥書)頃写一冊。
- 18 註7一〇七―一〇九頁参照。
- 19 『至花道』が「皮」を幽玄や「見」に当てる着想も、『愚秘抄』が幽玄体を「皮」に当てる一方、幽玄体の中に見様体を含めているところに示唆を得ているのかもしれない。註7二九四頁参照。
- 20 表 章・加藤周一『世阿弥 禅竹』(日本思想大系24 岩波書店 一九七四年四月)一三〇頁参照。